

## ～実践報告～ 4年ぶりのキャンドルサービス実施

朝倉万紀子 仙井勇三子 大石美代子 山下佳織

### 要旨

新型コロナウイルス感染症流行により、施設での実施を中止していたキャンドルサービスを4年ぶりに実施した。実施目的は変わらないが、全学年が初めての実施となること、感染症対策が必要なこともあり、多くの方の協力と調整のもと実施ができた。そこで2023年度のキャンドルサービスについて振り返り、当校の特色でもあるキャンドルサービスの実施を報告する。

Key words : キャンドルサービス 特別教育活動

### はじめに

聖マリアンナ医科大学看護専門学校では毎年クリスマスの時期に特別教育活動として関連施設でのキャンドルサービスを実施し、キャンドルの灯と歌を届けている。もともと聖マリアンナ会高等看護学院時代からクリスマスのミサ行事が行われており、キャンドルサービスについて明らかな記載が残っているのは「聖マリアンナ医科大学創立十周年記念誌（昭和55年発行）」のため、40年以上続いている当校の歴史ある行事となっている。2020年から2022年までは新型コロナウイルス感染症流行に伴い中止、学内での代替え内容の実施をしていたが、2023年12月に再開となり、4年ぶりに関連病院でのキャンドルサービスを実施した。

全学年がキャンドルサービス未経験であったが、無事実施することができ、学生からも様々な反応が得られていた。今回3年ぶりの実施となり、改めて当校におけるキャンドルサービスの実施の意味を考えるため、まとめることにした。

### I. キャンドルサービスの概要

実施日：2023年12月21日

実施目的：クリスマスや年末を病院や施設で過ごす人々の心を癒し、光と平和と愛を分かち合う

参加対象学生：全校生徒

実施施設：関連施設4病院

### II. 当日までの準備

キャンドルサービスはもともと担当委員の学生が主体になって運営実施するが、4年ぶりの実施となり経験したことがない学生が運営することと、感染拡大防止の観点から新型コロナウイルス感染症流行前と同じ方法では実施ができないため、今年度に限り教員の方で当日までの動きや作成物について指示・作成を行った。

感染拡大防止策とし、実施時間を18時～19時の1時間と、これまでに比べ時間短縮をし、マスク着用での歌唱に変更した。また、施設により感染対策が異なる点もあるため、実施方法を各施設看護部と確認し調整を行った。大学病院は新入院棟となり初めての実施となるため、歌唱方法やルートは看護部の方と実際に病棟を回り調整。その中で入院棟以外の外来エリアや緩和ケアセンターでの歌唱も提案され、当校の卒業

生や勤続年数の長い管理職の方と意見を出し合いながら、今の時代にできるマリアンナの伝統あるキャンドルサービスを共に検討した。

学生は 15～18 名程度の 3 学年混合グループが結成され、当日各施設または病棟で歌唱することになる。全学年 1 年次に履修する音楽および特別教育活動音楽は感染拡大防止の観点から授業内での歌唱ができておらず、教員は当日学生が歌唱できるのか懸念していた。教員が歌唱練習の促しをするも、各学年試験期間や実習期間が異なり、担当グループでの歌唱練習は当日までできず、各学年または各クラスでの歌唱練習が数回行われた程度で当日を迎えた。

これまでは委員の学生が病棟師長へ事前挨拶を行っていたが、実習以外での病院施設への立ち入りが禁止されているため、事前に歌唱ルートが看護部連絡会を通し提示され、当日実施前に挨拶と最終確認をすることとした。

### Ⅲ. キャンドルサービス当日の状況（主に大学病院）

キャンドルサービス委員と最終打ち合わせを行い、各施設ごとに集合し歌唱練習後、18時にキャンドルサービスが実施できるよう施設へ出発。当日の運営、各グループの引率は担当委員が実施し行動。2年生が指揮をとるが、大学病院以外の施設は初めて訪問する1・2年生も多いため、3年生がサポートし委員間でも学年を超え協力し行動していた。

これまで大学病院では正面玄関入口にある聖マリア像の前で歌唱し病棟に出発していたが、密になってしまうため今年度は大学病院担当のキャンドルサービス委員のみで正面玄関と外来フロア、緩和ケアセンターでのキャンドルサービスを実施。その後、

委員の学生は担当フロアへ移動し、各病棟師長に挨拶と歌唱ルートや病棟内での注意事項の最終確認を行い、他学生の到着を待ち 18 時に一斉にキャンドルサービス開始となった。

#### 1. 患者・スタッフの反応

今年度は病室内ではなく病棟内廊下での歌唱であったが、病室から出て歌を聴いたり、キャンドルの灯を見にくる患者さんも多く、学生へ感謝の言葉をかけてくれたり、中には涙している患者さんもいらした。

また、日勤後のスタッフがキャンドルサービスを見るために残っていたり、スタッフが患者さんと一緒にキャンドルサービスを受けてくれた病棟もあった。

#### 2. 学生の反応

12 月終業前の時期であり、各学年実習や試験の疲れが色濃くみられていたが、集合時間になるとキャンドルサービス委員が中心になりグループ毎に歌唱練習を開始。例年 5 曲歌うところを 3 曲へ減らしたが、練習の中では 3 曲問題なく歌えていた。

本番ではタイミングで歌うのか、どう移動するのかなど、まだ慣れない病棟での移動に加え、歌唱しつつキャンドルの灯が消えないよう移動することなど実践ならではの気づきや困難があったと話していた。

学校に戻ってきてからは歌唱曲を繰り返し歌ったり「楽しかった」「患者さんが感動してくれて私も感動した」「よかった」などといった言葉が多くでていた。一方で撮影禁止のアナウンスを病棟に依頼し実施してもらったが、スマートフォンでキャンドルサービスを撮影する患者さんもあり「(写真または動画を)撮られるのは嫌だった」「SNS に上がったら嫌だ」な

どの発言もみられた。

大学病院以外の施設も各施設担当者の協力およびマネジメントにより時間通りの実施終了ができた。グループ人数を 20～25 名としていたが、1 時間での実施となりさらに小グループに分け歌唱となったことで声量が確保できず「歌が聞こえなかった」という意見も得られた。

#### IV. 4 年ぶりの実施をしてみて

私自身、関連施設で勤務をしていたころ 1 度だけキャンドルサービスを患者さんと一緒に見学したことがあった。病棟の電気が消えた暗い中で、看護学生の歌声とキャンドルの灯がつくりだす空間は、まさに非日常であり、特別な時間であると感じたことをよく覚えている。今回初めて実施側としてキャンドルサービスに携わったが、キャンドルサービスは実施する側が何をするかだけでなく、そこから得られる患者さんや家族、スタッフからの反応があつてこそ心を癒し、光と平和と愛を分かち合うものだと感じた。一方的に歌い歩くのではなく、学生がしっかり患者さんたちの反応を自分で意識して感じたからこそキャンドルサービスが看護としてのケアになり、看護学校としての特別教育活動の意味が果たされるのだと感じた。看護学実習の中で、患者さんに対し納得のいく成果を明確に得ることは難しく、看護師になってもそれは容易なことではない。しかし、キャンドルサービスを通し、自分の行動が目の前の患者さんを

癒すことに繋がったと感じることは、看護を実践するものとして大きな意味があるのではないかと考える。

今後の運営については、次年度以降、学生主体の企画運営形態をとっていくため、今年度の「やってみた」から「どう気持ちを届けるか」をテーマに学生の運営サポートを実施していく。また、教員側としてはスマートフォンでの撮影に対する学生の個人情報保護の問題へのさらなる対応検討と、酸素療法中患者の病室・病棟に対するキャンドルの火の取り扱いに関する検討を行い、安全かつ安心なキャンドルサービスが実施できるようにしていく。

おわりに

過密な 3 年課程の看護教育スケジュールの中で特別教育活動の実施をしているが、こうした特別教育活動は教員が何かを教える、伝えるのではなく、学生自らが感じ、考え、目に見えない成長につながる機会であると考えている。今後も当校の教育目的である豊かな人間性を備えた看護師育成のために、こうした学生の成長の場を確保できるよう努めていきたい。

4 年ぶりの開催となり、新型コロナウイルス感染症により施設内の状況も大きく変化した中で、キャンドルサービス実施にあたり調整をしていただいた看護部の皆さま、当日安全に開催できるよう調整・対応していただいた病棟スタッフの皆さまに感謝申し上げます。